

アズールレーン二次創作 ～ 今日もあの娘は元気です ～

ながやん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——アズールレーン。

それは、謎の敵に脅かされる世界の守護者達。

蘇りし海神の御子達は、鋼鉄の戦乙女となって大洋を馳せる！

この物語は、キューブによって生まれた少女達の戦いの記録。

※参考文献：ウイキペディア

目次

| | |
|------------------------|----|
| RADICAL WOMAN LASH | 41 |
| CASTLE TOWER LABYRINTH | 36 |
| SUMMER BEACH TAG MATCH | 31 |
| SUBMARINE BRIDGE | 26 |
| SHOW THE FLAGSHIP | 21 |
| HUNTING NIGHT | 16 |
| BIG SEVEN ATTACK | 12 |
| SISTAR SUPPORT | 9 |
| PRACTICE ATTACK | 6 |
| WAR MONGER GIRL | 3 |
| ONLY MY FAIRLADY | 1 |

ONLY MY FAIRLADY

潮風がカーテンを揺らして、午後の熱気を連れて去る。

大洋の秩序を守るべく結成された軍事同盟、アズールレーンの母港は今日も平和だった。

指揮官はいつも通り、執務室で溜まった書類仕事と格闘中。

そして、いつものように室内には楽しいハミングが響く。

少し離れた秘書用の机で、彼女は上機嫌だ。

指揮官が自ら選んだ秘書艦、最も信頼するKAN—SEN……レ

デイ・レックスことレキシントンである。アズールレーンの歌姫は、

まるでピアノを奏でるように端末のキーボードを叩いていた。

その美貌について、指揮官は魅入ってしまう。

レキシントンは視線に気付いたのか、こちらを向いてクスリと笑った。

「あらあ？ 指揮官、どうしたのかしら？ 手が止まってるわ」

若くして艦隊の指揮を執る少年は、事務仕事に苦手だ。

だが、この手の書類は毎日貯まる一方で、レキシントンにばかり頼る訳にもいかない。艦隊の最高責任者として、最後に決済するのは指揮官なのだから。

彼は渋々、口をもごつかせての全面降伏。

素直に見惚れていたのだと白状した。

レキシントンは余裕の笑みで、優しげなまなじりをさらに下げて微笑む。

「まあ……指揮官、いけないわ。今はお仕事の時間、そうでしょう？」
レキシントンの言う通りだから、頷くしかない。

そして、立ち上がった彼女がその時間を止めてくれる。

静かな昼下がりの午後、遠くに汽笛が響く。

軍港の喧騒も今は、歌姫を飾る伴奏のようにたゆたう。

レキシントンは、指揮官の執務机まで来て、優美なヒップラインをその上に乗せる。ぐっと身を乗り出してくる彼女に、自然と指揮官は身を固くした。

今はもう、レキシントンの吐息が肌で感じられる程に顔が近い。

「指揮官、夜まで待てないのね？ ふふ、じゃあ……お姉ちゃんと、同じだわ」

大人の色香というものを、少年は彼女の匂いと味とで知った。

そして今も、麻薬のようなその魔性に虜になっている。

姉気取りの余裕と気配り、時々過保護で口うるさい……そんなレキシントンが、若き艦隊司令として働く指揮官を支えてきた。百戦錬磨のKAN—SEN達と共に戦う中で、彼女が指揮官を一人前にしてくれた。

大人の男にしてくれたのだ。

だから今も、レキシントンに恥じぬ男であろうとしている。

でも、どこかつい甘えてしまうのだ。

「ねえ、指揮官。……待ちきれないのは、貴方だけじゃないわ。だから——」

艶めく唇に、視線が吸い込まれる。

レキシントンの手が、そつと頬に触れてくる。

甘やかな匂いに包まれ、互いの距離は零に近付いた。

だが、不意に空気がサイレンの音で沸騰する。

ここは戦いの最前線で、戦うために二人は仲間達と共に集つたのだから。

敵襲を告げるけたたましさの中、つまらなそうにレキシントンは執務机から降りた。

「残念、やっぱりお仕事の間みたい。さ、指揮官。私に命令して頂戴？ お姉ちゃんが、貴方のかわいい娘達と一緒に出撃するわ。勝利の全てを、貴方のために……ね？ そうでしょう？」

指揮官は大きく頷き、レキシントンが渡してくる制帽を受け取る。

謎と驚異に満ちた海へと、抜錨の時が再び訪れた。

アズールレーン艦隊総旗艦、レディ・レックスことレキシントンの歌が征く……激戦を勝ち残り、数多の同胞を迎えて導く、それは女神の歌声。深海に眠る全てに鎮魂歌を捧げて、今日も指揮官はレキシントンの歌う戦場へと船出するのだった。

WAR MONGER GIRL

母港も少し歩けば、周囲に豊富な自然が広がっている。

地図にない島、秘密の基地……アズールレーンと呼ばれる、利害も国境も超越した艦隊の拠点だ。そして、ここから海へと船出する少女達は、その半数以上が二度と戻らない。

謎の敵対勢力と戦う日々は、終わりが知れぬことを教えてくれる。だからこそ、今日のような平和な日は貴重だった。

艦隊を預かる指揮官の少年は、浜へ降りて岩場を歩く。

「あ、指揮官……ふふ、見つかってしまいましたね」

潮が引いた岩場の影に、その少女は立っていた。

振り返るのは、重巡洋艦のローンである。キューブと呼ばれる未知の物質から生まれる、海神の加護を得た大洋の天使……KAN—SENと呼ばれる軍艦の化身だ。

ローンはブーツを脱いで、裸足で水の中を歩く。

彼女の足元を、潮に置いていかれた小魚達が泳いでいた。

「私のこと、探しに来てくれたんですね？ 指揮官」

指揮官と呼ばれた少年は、微笑むローンへと大きく頷いた。

彼女は他のKAN—SENとは少々異なる。キューブから生成されるKAN—SEN達は、今の技術では任意の艦を生み出すことが難しい。せいぜい、艦種が大雑把に指定できるくらいである。

そんな中、科学研究所ではキューブの研究が進んでいた。

開発ドッグにて、本来存在しない艦を新規設計、製造する試みがなされていたのである。

ローンはそうして生まれたKAN—SENだった。

だからだろうか、なかなか他の艦隊メンバーと打ち解けてくれない。

ローンは潮溜まりの中を歩きながら言葉を零し続けた。

「私、仲間を守りたい……みんなと仲良くして、協力して戦いたい、けど、駄目……駄目なんです」

ローンの戦いは、一言で言うところ、苛烈だ。

獅子奮迅という言葉は、彼女のためにある。

穏やかで柔らかな今の姿からは、想像もできない……軍神マルスの化身となりて、味方の最前線に立つて戦うのだ。己の身を盾とし、己自身を剣として闘争に踊る姿は、味方すら恐怖を感じて足が竦むという。

そう、普段とは裏腹に狂戦士じみた姿が、多くの仲間達に恐れられている原因なのだった。

「でも、みんなは理想のため……指揮官のために戦ってる。私とは違うんです。私は……私にとっては、戦いこそが目的。手段そのものに他の目的は必要ないんです」

自他ともに認めるウォーモンガー、それがローン。

戦争のために生まれたからこそ、誰もがその外に戦い以外を求める。友情や愛情、趣味や娯楽……一部のKAN—SENは既に、他の軍人と男女の仲だし、ケツコンした者達も多い。

勿論、指揮官にもそういう女性はある。

母港では、KAN—SENとの重婚はむしろ推奨されており、彼女達に戦い以外の世界を広げてやることは人類の使命とも言えた。

そのことを伝えたいのだが、指揮官の不器用な言葉が気持ちを象らない。

そして、ローンは足元に視線を落とす。

「戦うのが、好き。破壊と殺戮が、好き。誰かのためじゃなくてもいい、自分のために戦ってるの。だから……私は、みんなとは違う」

彼女は恐らく、知っているのだろう。

自分のような戦争狂は、平和な時代には生きられないと。そして、平和を望んでいない自分自身の本性を、誰よりも理解しているのだ。それは、平和のために戦う艦隊の中では少し息苦しい。

平和がもし訪れるなら、その平和とさえ戦わねばならないからだ。指揮官は意を決して、濡れるのも構わず潮溜まりへと歩み出す。

靴やズボンが濡れたが、そのままローンの前に進んで彼女に向き合った。

「あの、指揮官？」

——君が、必要だ。

それだけしか言えなかった。

華奢な肩に両手を置いて、じつと大きな瞳を覗き込む。

だが、ローンは目を逸らして、寂しそうに笑った。

「私は、この潮溜まりの魚達と同じです。潮が満ちればよし、それまでにこの場所が干上がれば……一緒に死んでしまう。私にとって、海とは戦い。波濤の果てに見るは、平和ではなく、闘争。こんな私じゃ、みんなと並べない……一緒にいられない」

魚は海とは離れられない。

他のKAN—SEN達のように、陸に戦い以外のなにかをローンは見つけられないという。

そして、平和という名の太陽が天に輝けば、戦いの海は消えてしまうのだ。

指揮官が必死で自分の中に言葉を探していた、その時だった。

「あ……居た、です。こつち。ローンさん、発見です」

「ナイス、綾波っ！ ふえー、こんなところじゃ日に焼けちゃうよー」

「ローンさん、元気ない？ アメさん、あげたら元気、でるかなあ」

他のKAN—SEN達がやってきた。

皆、ローンを探してたのだ。

指揮官が命令せずとも、孤独な仲間を孤独なままにさせない……そういう雰囲気がこの艦隊にはあって、それは家族の絆に似ていた。

ケツコンせずとも、指揮官にとって皆は家族以上の存在だった。

帰ろう、とようやく言えた。

皆もウンウンと頷く中、ローンはぎこちない微笑を向けてくる。彼女の、生まれ持った闘争本能との戦いは終わらない。だが、彼女が自身の狂気と向き合う限り……アズールレーンの鉄壁の盾は揺るがぬ強さで仲間達を導くのだった。

PRACTICE ATTACK

アズールレーンで艦隊を預かる指揮官の仕事は、多岐にわたる。

最大で六つの艦隊、そして二つの潜水艦隊を統率し、運営する。燃料と資金を管理し、適切に使って戦線を維持しなければいけない。勿論、家族も同然のKAN—SEN達との付き合いも大事だ。お茶会に呼ばれたり、散歩に誘われたりと忙しい。

そんな中でも、特に頭の痛い仕事がある。

執務室で端末に向き合う彼は、今日も悩みの種を前に四苦八苦していた。

窓の外から声がしたのは、そんな時だった。

「Hey! 指揮官、ケントだよ! ……なんか、忙しい? 邪魔、しちゃった?」

振り返ると、カーテンの揺れる窓辺に笑顔が浮かんでいた。

重巡洋艦のケントが、大きな瞳を輝かせている。

大丈夫だと告げると、彼女は嬉しそうに窓からよじ登ってきた。スカートが短いので、下着が見えそうになってしまう。思わず指揮官は目を背けたが、ケントは自分の危うい開脚っぷりに気付いていないようだ。

ケントはいつも陽気で前向き、ポジティブの固まりのような少女である。

時に能天気とも言える程に楽天家なのだ。

「どれどれ? 指揮官のお仕事は、っと」

気安く身を寄せ、机の上の画面を覗き込んでくる。

すぐ間近で、頬と頬とが触れそうな距離だった。

鼻孔をくすぐる甘やかな香りが、外から吹き込む風に乗って執務室に満ちる。

「Error、演習かあ……他の指揮官とはどう? そういえば、聞いたよ! この間、少将になったって。Excellent!」

今、指揮官が難儀しているのは、他の艦隊指揮官との演習である。それぞれ、自分達の率いるKAN—SENをデータ化し、脳空間で

の演習を行うのだ。勝敗や戦闘内容は、即座にデータ元であるKAN—SENに反映される。燃料も使わず、大破や沈没を気にせず練度を上げることができるのだ。

そして、大切なKAN—SENを鍛えるのと同時に、指揮官の手腕も問われる。

他の管区の者達との交流の場でもあり、真剣勝負……勝敗は階級にも影響を及ぼすのだった。

「ふむふむ、もう演習の時期かあ……あつ、指揮官！ NO！ これは駄目、駄目だよっ！」

ケントは端末の画面を見ながら、勝手にキーボードに触った。

一応、指揮官は数値化された互いの戦力を基準に演習相手を選んでいく。だが、セッティングしたマッチングを即座にケントは初期化しようとした。

慌てて止めるが、彼女はフンと鼻を鳴らして少し得意げに話し出した。

「よろしい、ケント選手が教えてあげるよ？ んとね、これは……この艦隊は、鮫だね！」

鮫、つまりシャーク？ 言ってる意味がわからない。

だが、ケントが指差す演習相手は、何故か前衛艦がベルファストだけである。ベルファストはロイヤルの艦で、最優秀軽巡の誉れも高きKAN—SENだ。貞淑で従順なメイド姿は、戦場ではお茶やお菓子の代わりに砲弾と魚雷を運ぶ。掃除するのは家の汚れではなく、海にびこる全ての悪だ。

後衛の主力艦隊も、駆逐艦好きで有名なアークロイヤルのみ。

二隻編成のため、大きく数値が下がった状態で表示されている。だが、ケントは立てた人差し指を振りながら唇を尖らせた。

「ベルの練度を見て、指揮官。もう100を超えてる。アークロイヤルも。こういうのは、実際に戦ってみるとしぶとくて、最終的には負けちゃうの。でも、見た目の戦力数値だけは低いから、つい対戦しちゃう。私達は鮫って呼んでるんだ。送り狼みたいに恐ろしいやり口だよ！」

鯨なのか狼なのか、少しはつきりしてほしいところだ。

そして、他の演習スケジュールにもケントは目を通し、色々アドバースをくれる。

「ジュノーはこれ、軽巡のジュノーだね。Easyな相手じゃないよ、あの娘は戦闘不能になると仲間を回復させるからね。あ、そつちも駄目！ 長門に赤城、加賀つてのは本当にやばいんだってば！」

まるで自分のことのように、ケントは熱心に教えてくれた。

指揮官とて、一時期は少将まで上り詰めた自負と自信はある。だが、日々演習での戦術トレンドは進化しており、大勢の艦隊指揮官の中でも自分がまだまだ駆け出しだという自覚はあった。

数値に表れぬことにこそ目を配る……それが演習での出世のコツらしい。

だが、指揮官が本音を漏らすと、ケントは目を丸くした。

「Oh……指揮官、出世には興味がないの？ 私達の経験、鍛錬の方が大事？ そつかあ……指揮官、欲のない人なんだね！ でも、覚えておいて」

ケントは珍しく真面目な顔をして、それからいつも通りの笑顔を咲かせた。

満面の笑みで胸を張り、エヘンと彼女は言ってくれる。

「ケント達の命は全て、指揮官のもの……迷わず信じて海へ出るよ。それは演習でも実戦でも変わらない。だから、階級より私達のことを考えてくれるの、嬉しい！ 覚えておいて……みんな全員、期待に答えたくて頑張ってるから！ 勿論ケントも！」

嬉しい一言に、思わず指揮官も頬が緩む。

とりあえず、演習に詳しいケントには率先して出てもらうことにして、こちらの演習艦隊を再編成する。こうして今日も、同じ平和を目指す無数の指揮官達と同様、彼も演習結果に一喜一憂することになるのだった。

S I S T A R S U P P O R T

彼はいつも、昼食を寮舎の食堂で取ることにしている。

艦隊を預かる指揮官の中には、秘書艦と二人きりの昼食を取る者も多い。運転手を召し抱えて、車で母港に出る者もいる。

だが、彼は部下にして家族のKAN—SEN達で賑わう、この食堂が好きだ。

特型駆逐艦達は、今日も元気で騒がしい。

ジャンパールとマサチューセツツも、なんのcanので仲がいいようだ。

そうして周囲の光景に目を細めていると……彼の座るテーブルの前に人影が立った。

「あの、指揮官……少し、いい？」

褐色の肌も顕な、健康的に過ぎる肉体美の少女。

名は、インディアナポリス。

彼は断る理由がなくて、向かいの椅子を進めた。

だが、インディアナポリスはトレーを持ったまま、その場で立って話し始めた。

「お姉ちゃんのこと、なんだ、けど」

日頃から寡黙で控えめ、いつでも黙って仲間の盾になる娘だ。インディアナポリスは、普段は姉のポートランドの影に隠れがちである。

というか、ポートランドの個性が突出して強烈なため、自然と印象が薄いのだ。

だが、ある種奇行とも言えるポートランドの日常は、妹の彼女と深い関係がある。

「お姉ちゃん、ね……その、男性経験、ないから……彼氏とか、いたことなくて」

少しもじもじしながら、インディアナポリスは伏目がちに話す。

「でも、あの……指揮官のこと、好き。だと、思う、の……だから、あんなに」

そう、ポートランドは彼を見かけるたびに駆け寄ってくる。まるで

じやれつく子犬のように、右に左とつきまどつてくるのだ。迷惑だと思つたことはないが、やはり異様なのは確かである。ポートランドは誰とでも仲がいいが、そんな仲間達でさえドン引きしている。

ポートランドは、重度のシスコン……病的なまでのシスターコンプレックスなのだ。

その興味と愛情は全て、妹のインディアナポリスに注がれている。そして、指揮官に自分の妹愛をゴリゴリと語ってくるのだ。

そのことを謝罪しつつ、インディアナポリスが弁明の言葉を紡ぐ。「お姉ちゃん、男の人に、免疫、なくて……なに話していいか、わからないんだと思う」

そうだったのかと、彼は驚いた。

そして、ようやく謎が解けた。

インディちゃんインディちゃん、インディちゃんが！ と迫ってくるポートランドの、あれは不器用なコミュニケーションだったのだ。「私のことしか、話せないから、ああいう形になるんだと思う。お姉ちゃんには、戦いと私以外、なにもなかつたから。……今までは、そうだったから」

だが、今は指揮官がいる。

インディアナポリスをはつきりとそう告げた。

「だから、指揮官。お姉ちゃんのこと、お願い……私は、我慢、するから……指揮官のこと、我慢するから」

前後の文脈に繋がらない言葉が混じつたが、彼は去ろうとするインディアナポリスを引き止めた。そつと手で、座るように促す。

一緒に昼食を共にして、もつと話したいと告げたのだ。

すぐにインディアナポリスは、頬を朱に染め瞳を潤ませた。

「そんな……お姉ちゃんに、悪いし。……でも」

インディアナポリスは、とてもいい娘だと彼は思った。

だが、そんな穏やかで優しい空気を、身悶えるような甘い声を引き裂いた。

「あつ、インディちゃん！ インディちゃん、ここにいたのね！ つつて、はうっ！ し、指揮官も！ ……あー、指揮官！ やつとインディ

ちやんの魅力に気付いたんですね！」

ポートルランドだ。

彼女は、トレーの上にこれでもかと料理を乗せてこっちにやってくる。

目がキラキラと輝いていて、なるほど恋する乙女のそれを感じ取ることが出来るかもしれない。だが、彼女は普段と変わらず指揮官にぐぐいと詰め寄り、その隣に座ってしまった。

「ほらっ、インディちゃん！ お姉ちゃんが取ってきたあげたから。サラダでしょ、フルーツでしょ、お肉にお魚、あ！ 指揮官も食べますー？ インディちゃんはー、好き嫌いしないいい子なんですよお？」

「は、恥ずかしい、お姉ちゃん。ごめん、なさい、指揮官」

だが、事情は先程インディアナポリスから聞いた。

ポートルランドは、今日も妹トークで果敢に迫ってくる。彼女の世界は妹が全てで、世界とは即ち妹なのだ。そこに今、指揮官という生まれて初めての異性、妹以外の興味の対象が現れたのである。

話したい、語りたい、もつと言葉を。

そう願うポートルランドには、インディアナポリスの話題しかないのだった。

改めて指揮官はインディアナポリスを向かいに座らせ、三人で昼食を再開させる。ポートルランドは健啖家な食いつぶりを見せながらも、五秒に一回はインディちゃんと発しながら、一生懸命語りかけてくれる。

それを見詰めるインディアナポリスは、優しくして少し切なそうな眼差しを細めているのだった。

BIG SEVEN ATTACK

指揮官には毎日、任務が山積みである。

KAN—SEENの少女達が学園に通う午前中、黙々とデスクで仕事を片付けてゆく。艦隊の再編成や模擬戦の手続き、そして燃料の備蓄管理……今日も猛烈に忙しかった。

そろそろ昼食の時間も迫った、そんな時である。

執務室のドアがノックされ、返事もまたずに開かれた。

そこには、目も覚めるような美女が顔を出している。

「指揮官、お邪魔でしたか？ よかったら昼食をご一緒しようと思つて」

彼女の名は、ロドニー。

あのビッグセブンの一角で、ロイヤルネイビーが誇る大戦艦だ。

ロドニーは、ビッグセブンの名にふさわしい胸を揺らして、そっと入り込んでくる。あつという間に彼女は、指揮官の座る執務机に身を乗り出してきた。

思わず指揮官は、彼女との距離を保つべく仰け反る。

満天の星空を閉じ込めたような瞳が、人懐っこい笑みに輝いていた。

「たまには港に出ての食事はどうですか？ 私、美味しい店を知ってるんです」

冷や汗が浮かぶ感触に、指揮官は肌を粟立たせた。

だが、ロドニーは楽しげに胸の谷間からメモ帳を取り出す。

否定も肯定も許されない少年の前で、敢えてロドニーは気付かぬフリをしているのだ。自分の背中に今、38cm砲の徹甲弾の如く視線が突き刺さっているというのに。

想いを念じて空気を読めとばかりに、視線が険しくなる。

それでもロドニーが無視を決め込むので、とうとう秘書艦は椅子を蹴った。

「ちよつと、ロドニー？ 弟くん、困ってるんじゃない？？」

「あら、レキシントン。……ふーん、弟くん、ですか」

「そ、そうよ。いけない?」

「いいえー、とんでもない。むしろ大歓迎です。では、指揮官。お店を選びましょうか。なんなら、私が手料理を振る舞ってもいいんですけど」

「ロツ、ロドニーー!」

やばい、かなりやばい。

指揮官はちらりと、ロドニーの向こうにレキシントンを見やる。長らく秘書艦を務めてくれている女性は、目が合うなりツンと顔を背けた。

これは、彼女が物凄く怒ってることを示すサインだ。

日頃は好きだけ甘えさせてくれても、ちよつと機嫌を損ねればこれだ。

指輪を贈って結婚した今も、弟くん扱いな日々は悲喜こもごもである。

「レキシントン、お姉ちゃんなら聞き分けないと。ね?」

「ね、じゃありません! 指揮官はお昼は、私と食べるんですもの」

「毎日同じ顔ばかりじゃ、それもレキシントンとじゃ、指揮官も疲れちゃいますよ」

「……どういう意味、かしら? ロードーニィ〜?」

「ふふつ、まあ怖い」

——執務室海戦、勃発。

因みに、第何次かは忘れてしまった。

レキシントンが大鳳と揉めた第七次執務室海戦以来、数えるのをやめているのである。

勿論、他のKAN—SENがそうだったように、ロドニーも引く構えを見せない。

そして、彼女はあろうことか執務机に腰掛けた。

そのまま腕を伸ばして、指揮官の顔を胸に押し付け抱き締める。

「私なら、指揮官の疲れを癒やしてあげられると思いますよ? 少なくとも、疲れの原因である誰かさんよりは」

「あら……いいのかしら? そんなこと言つて」

「真実は時に残酷ですが、指揮官のためですし」

「……そお、真実……残酷、ねえ〜？」

カツカツと歩み寄ってくるレキシントンが、ロドニーの眼前に仁王立ちになった。腰に手を当て背筋をそらして、形良いバストがツンと上を向く。

ロドニーは余裕の表情で、流石は年上の貫禄というところだろうか。

だが、その笑みが僅かに翳った。

レキシントンの一言で。

「ネルソンから聞いてるわよく？ 貴女、他の艦隊の指揮官にも粉か
けてるんですって？」

「あつ……それは」

「ネルソンとはよく話すのよ？ お互い、面倒な妹を持つと苦労す
るって」

「面倒な……妹。姉さんが、そんなことを……」

「ま、指揮官とお昼くらい多目に見るけど、少しは……あ、あら？ ロ
ドニー？」

ギユム、とロドニーが指揮官を抱き締めてくる。

彼女は小さく溜息を零すと、そつと指揮官を放した。

甘やかな吐息が頬を撫でたような、そんな薔薇色の予感が去ってゆ
く。

「ふふ、そう、ね。だって、焦れたいんですもの。どこの指揮官もみ
んな」

「……うちの指揮官も？」

「そうよ？ レキシントン、秘書艦なんかやってるだけじゃ、縮まる距
離も縮まらないですよ？ 少しわがまま言っつて、振り回して困らせる
くらいじゃないと」

「ふうん、そうね〜……まあ、考えておくわ」

なんだかよくわからないが、二人の表情が柔らかくなった。

目に見えぬ砲火が交わされたあとの、修羅場寸前の執務室海戦が終
わったようである。ほつと胸をなでおろしていると、ボリューミーな

お尻を執務机からおろして、ロドニーが振り返った。

「指揮官？ 港の方にオムライスの美味しいお店があるんです。たまにはここの食堂ばかりじゃなく、ちゃんとレキシントンを連れ回してください？ いいですね？」

それだけ言うと、トンと人差し指で指揮官の胸を叩いて……ロドニーは行ってしまった。

呆気にとられて見送りながらも、おずおずと指揮官は席を立つ。

先程のロドニーの言葉をそのまま伝えたら、レキシントンは今日一番の笑顔を見せてくれた。それは、姉を気取って世話を焼く時とは別の、一人の女声としての笑みだった。

HUNTING NIGHT

アズールレーンの指揮官として着任する際、ある程度のサバイバル教練は受けている。

だが、マツチもライターも使わず火を起こすのは久しぶりだ。少年は悪戦苦闘の末に、木くずの中から白煙を立ち上らせた。乾いた臭いと共に、満天の星空へと火が昇る。

アズールレーンの全艦隊が共有する母港は、地図にはない秘密の島にある。まだまだ内地には自然が豊富で、こうした闇深い森も存在していた。文明から切り離された大自然は、少年の心を凍えさせる。

その時、背後でガサガサと気配が動いた。

「こら、ゲールマン。指揮官が驚いてる」

振り向いた瞬間には、大きなジャーマンシエパードに押し倒されていた。

そして、その向こうから一人の少女が近付いてくる。

H級駆逐艦、ハンターだ。

その名の通り、今日は彼女たちの狩りにご一緒させてもらっている。

これは、指揮官がいないと危ないと上層部が判断したからでもあった。そして、指揮官が望んで二人との時間を持ちたいと願い出たのである。

「ごめん、指揮官。ゲールマンは、どうやら指揮官が気に入ったようだ」

ハンターが声をかけると、狩猟犬のゲールマンがおとなしく彼女の足元に戻ってゆく。

指揮官が立ち上がると、目の前にドサリと今日の獲物が並べられた。

まるまると太った兎が三匹。

勿論、今夜の夕食である。

「兎は初めて？ 大丈夫、くせがなくて食べやすいし、毛皮はとても暖かいんだ」

ハンターは腰に下げたナイフを取り出し、兎を解体し始めた。
言われるままに、指揮官は水を桶に組んでくる。

可憐な少女の細い手と指とが、命を切り取り、糧へと変えてゆく。
じつと見守る指揮官は、彼女が雷撃と砲火で戦う軍艦、KAN—SE
Nであることさえ忘れてゆく。

海で戦っている時より、どこか厳かな雰囲気さえあった。

だが、その静寂が破られる。

もう一人の狩人が、意気揚々と戻ってきた。

「Hey ya! デュラハンクルーザー様のお帰りだっ！ 見ろよ、指揮官！」

大きな鹿を抱えた、ミネアポリスだ。

彼女は暗がりの中でもはつきりわかるほど、褐色の肌を高揚させていた。上気した笑顔は澁刺として、瞳が輝いている。

思わず指揮官は感嘆の声をあげ、拍手してしまった。

えっへん！ とミネアポリスは胸を張ったが、溜息が静かに響く。

「……わたしたち三人では、そんなに沢山の糧はいらない。ミネアポリス、無駄な狩りはしないことだ」

「なっ……ハンター！ 私の狩りにケチをつける気かっ！」

「そのつもりはないけど、教えておく。真の狩人は、銃を持つ手を塞ぐような狩りはしない」

「ハッ！ ジョンブルお得意のお説教かよ。……ダメ、だったか？」

「そうは言っていない」

手早くハンターは、焚き火に兎の肉を並べた。

毛皮を剥がされ血抜きされた肉が、串に刺されて地面に突き立つ。

そのまま彼女は、鹿を降ろしたミネアポリスに寄り添い、ポンと背を叩く。

「弓か？ 銃？」

「いや、ナイフで」

「……どうやって？」

「(こう、(こうして……(こうやってさ！)」

「まるで原始人だな」

「おいおい、褒めるなって。まー、私くらいになれば得物はなんでもいいんだ」

「……訂正する、猿人レベルかもしれない」

「照れるなあ、はは」

仲が良いのか悪いのか。

だが、二人は協力して鹿を解体してゆく。

きつと、学園の食堂でもジビエは喜ばれるだろう。

それに、狩果を前にとても嬉しそうだ。

顔にこそ出さないが、ミネアポリスを見詰めるハンターの瞳は優しい。ミネアポリスも、普段は孤高の不思議な艦で通っているが……ハンターの前では少女らしい笑顔さえ見せるのだ。

指揮官はキャンプでベンチ代わりにしているマルタに腰掛け、二人を見守った。

やがて、香ばしい匂いとともにパチパチと兎の肉が歌い出す。

「よしっ、まあこんなもんだろ。下処理しとけば、明日の朝イチで厨房行きだぜ」

「重桜では鹿は紅葉というらしいな。食べる文化があるから、料理を手伝ってくれるだろう」

「それよか、飯ぜ！ 飯っ！」

「ゲールマンにも食事をあげないと」

彼女達が山野にのびのびと生きる、そういう日は来るのだろうか？ 終わりの見えぬ戦争は、日々激化している。

絶えず大怪我をするKAN—SENが曳航されてきて、その何割かは帰らぬ人となる。セイレーンと呼ばれる謎の勢力は、その目的も規模も、全てが謎のままだった。

加えて、重桜と鉄血の一部がレッドアクシズと称する軍事同盟を結成した。

レッドアクシズには、ユニオンやロイヤルからの離反艦も多く参集しているらしい。

「おい、指揮官！ なんだあ？ ボーツとすんなよ」

「肉だ、指揮官。軽く塩を振ったが、気になるならカレー粉や黒胡椒を

使うと良い」

「さあ、食おうぜ。大地の恵みに感謝を」

「海からの風に感謝を……いただきます」

丸太に三人で並んで、兎の肉を頬張る。

指揮官を挟んで座る二人も、食事の時は笑顔を綻ばせた。

わずか半時間前まで、生きていた肉……その触感、ジューシーなのに驚くほど軽い。舌に広がる旨味は、自然と脳裏に疾駆する兎の躍動を浮かび上がらせた。

指揮官が軽く感動している横で、ミネアポリスはあつという間に兎を平らげる。

「美味えー！ やっぱこうして大地の恵みを食わなきゃな。学園の飯も美味しいが、魂が乾いちまう。で、心が乾けば命の水が必要ってね」

ミネアポリスはポケットから、銀色のスキットルを取り出した。中身はブランデーのようである。それを直接口に付けて、彼女はグビりと飲んだ。

すつと通りの良い首筋が、焚き火の照り返しに色つぽい。

すぐにミネアポリスは「ほらよ」とスキットルをハンターに投げた。

まるでそれが当然のように、ハンターも琥珀色を口に含む。

「……意外だな。かなりいい酒だ」

「だろ？ 大鳳の部屋からちよろまかしてきた」

「怒られるぞ」

「二人で謝りやいって、ダイジョーブ！」

「フツ、とんだ共犯者様だな。指揮官もやるか？」

スキットルを差し出されて、指揮官は兎を頬張るのをやめる。

未成年だから、お酒はあまり飲んだことがない。

どうしてもレセプションや式典の席で、形式的にグラスを持つ程度だった。舐めてみたこともあるが、どうにも積極的に摂取する意義を見いだせない液体である。

だが、どういう訳か今日は、素直にハンターから酒を受け取る。

今は二人と星空しか、見ていない。

軍規も法律も、この大自然では身を暖めてはくれないのだ。

しかし、思い切って飲んでみた瞬間、喉を焼くようなアルコールにむせて咳き込んだ。

「おいおい、指揮官。零すなよー、高かったんだぞ？ この酒」

「自分で買ってきたような顔をするな、ミネアポリス。まあ、大鳳の部屋に忍び込んだ勇氣には敬意を表するが。指揮官も指揮官だ、飲んだことがないなら無理はするな」

ハンターが背をさすってくれた。

だが、その時ミネアポリスが驚くべき行動に出た。

グイと身を寄せてきて、指揮官の左の頬を舐めたのだ。

「酒がもつたいないだろー、なあ」

「ふむ、そうだな」

ハンターまで、逆の右頬を舐めてくる。

ひんやりとした舌の感触は、その柔らかさが擦過したあとで風が冷たい。

それなのに、指揮官は顔が火照って、ただただ俯くしかなかった。

そんな彼を左右から覗き込んで、二人のKANSENは楽しそうに笑うのだった。

SHOW THE FLAGSHIP

夜の帳が母港を包む。

母国別に立てられた寮舎へ、夢見の時間が訪れたのだ。

当然、指揮官も昼間の激務でそろそろ眠く、宿舎に戻って寝るつもりだった。

だが、その彼が何故か、重桜寮の一室に座らされている。

眼の前には、市松人形もかくやという絶世の美少女が座っていた。身を正してシヤンとしているが、既に寝支度を整えている。白い肌が透けて見えるネグリジエが、未成熟な青い果実に瑞々しさを添えている。

少女は静かに、よく通る声を発した。

「余は、長門。重桜の長門」

そう、目の前にいる少女が、重桜の聯合艦隊総旗艦、長門である。あのビッグセブンの一角であり、欧米の戦艦にも決して引けを取らぬ大戦艦である。それを、アジアの小国が生み出したところから、徐々に歴史は加速度を強めていったのだ。

その長門が、真顔でじっと見詰めてくる。

少し居心地が悪いが、しようがない。

そして、この状況を生み出した元凶にして当事者が、背後でドアを閉めた。

「長門姉！　じゃあ、次はユニオン寮のみんなを連れてくるね！　急がなきゃー！」

元気いっぱい飛び出していったのは、長門の妹、陸奥である。

騒がしい彼女の足音が遠ざかると、部屋に静寂が満ちた。

長門の部屋は、和室である。そして、既に布団が敷いてある。枕は、二つ並んでいた。その状況を挟んで、指揮官は正座して長門の視線にさらされているのだった。

陸奥に先程、強引に連れてこられたのだ。

その説明を求めて視線を彷徨わせると、長門は小さく溜息を零した。

「……この度はすまぬ、指揮官。余の発言が軽率であった」
そう言つて、長門は「ふむ」と唸る。

しばし黙考するように視線を外し、少しずつ状況を話し始める。
重桜に所属するKAN—SENは、その多くが敵対勢力レッドアーク
シズに加わっている。暗躍する赤城と加賀、その背後に迫るセイレー
ンなる謎の敵……アズールレーンが平和を守る海域は広く、今も過去
の戦争を再現するかのような戦いが続いている。

そんな中、先日重桜本国から長門と陸奥の姉妹がやってきた。

ビッグセブンの七隻全てが、このアズールレーンに参集したことに
なるのだ。

「そこで余は、陸奥に他国の者たちとの交流の場を設けるよう、頼んだ
のだ。陸奥は、その、なんといったか……そう、ぱじゃまぱーてい、な
る集いを催すと言つてな」

——パジャマパーティー。

それで既に、長門はネグリジエと布団でスタンバイしている訳であ
る。

だが、肝心の他国のKAN—SENはまだ来ていないし、そもそも
パジャマパーティーとは女の子同士が集いが主流だ。この場ではやは
り、ユニオンやロイヤルといった、各国のKAN—SENと大いに語
り合うのがいいだろう。

じゃあ、そういうことで……と、指揮官が立とうとしたその時だつ
た。

「……指揮官？ フツ、脚が痺れたのか？ どれ」

長時間の正座は久しぶりで、気がつけば血の流れが滞っていた。ビ
リビリとしびれる足裏の感覚は、立ち上がることを許してはくれない。
い。

その場に尻もちをつく形で、失礼を詫つつ指揮官は脚を崩した。

そんな彼を立てて見下ろすと、長門は悠々と布団を超えてくる。

「指揮官たるもの、例え己に大きな変化があろうと……決してみだりに
顔に出してはならぬ。それが、余が我が重桜の子らを預けるにた
る、真の指揮官というものだ」

口では手厳しいことを言いつつも、グイと長門は指揮官の足首を掴んできた。

そのまま、片足を抱くようにして小さな両手で包んでくれる。突然のことで驚いた次の瞬間、背筋を電流が突き抜けた。

長門の細く白い指が、力を込めた訳でもなく、足を揉んでゆく。その都度、筆舌し難い痛みが全身を貫いてゆく。

「情けない声を出すでない。……よし、足の痺れはこれでよかろう」
天にも昇る気持ちで、地獄行きとはこのことだ。

ようやく解放されたが、気がつけば先程の痺れは消え去っている。東洋の医学は西洋とはまるで違うというが、実際に体験してみると驚きだ。

なにより、長門自身がこうして手を貸してくれるとは思わなかった。

着任よりずっと、彼女からは張り詰めた緊張感が滲み出ている。重桜の誰もが姉と慕う、小さな小さな総旗艦……指揮官もまだ、長門の笑顔を見たことがなかった。

「それで、だ。うむ……指揮官」

指揮官は許しを得て、あぐらで座り直す。

膝と膝とが触れる距離に、ずずいと長門は迫ってきた。

すぐ側で見上げてくる、精緻な小顔……そこに並んだ双眸は、まるで南海の黒真珠だ。潤んだその瞳の中に、情けない顔をした指揮官が写り込んでいた。

長門は、僅かに頬を赤らめながらも呟く。

「余は、陸奥にばじゃまばーていを許した。過去に遺恨はあろうが、今はセイレーンなる者たちの跳梁を前に、各国が団結すべき時。余も以前より、我が重桜の子に良くしてくれた者たちに礼を言いたいのだが……」

もじもじと胸元の薄布を手でいらいなながら、長門は目を伏せ俯いた。

長い睫毛が、夜露に濡れたように艶めいていた。

「余は、陸奥以外に親しい者がおらぬ。そして、陸奥は……少し、落ち

着きがなくて不安に思うのだ。陸奥が言う、ぱじやまぱーているもの……余に皆をもてなすことはできるだろうか」

指揮官は言葉に詰まった。

ちなみに、この『布団は一つ、枕は二つ』は、陸奥がセツティングしたらしい。任せると言った手前、長門は口を挟まなかった。西洋には妙な風習があるのだな、くらいにしか思わなかったのだ。

だが、陸奥が指揮官を連れてきたため、状況は一変したのだ。

「指揮官のことは、余も天城や阿武隈から聞いておる。我が重桜の精鋭たちを率いて、世界の驚異と戦っておると。指揮官の度量のおかげで、皆も他国の者たちと協力しておるとな。だ、だから——」

ツイ、と長門の人差し指が、膝に触れてくる。

ツツツと小さな円を描きながら、彼女はもじもじと言葉を続けた。

「余は……わたしは、指揮官とならば……その、ぱじやまぱーてい、構わぬと思っっている」

思わず指揮官は言葉を失った。

だが、長門は耳をピコピコと動かしながらも言葉を続ける。

「察するに、陸奥の言うぱじやまぱーているもの、当初は寝室での夜会のようなものを想像してた、けど……その、わたし……嫌じゃ、ないよ？ 重桜でも、同性同士で、そ、そのっ、絆を深め合う者たちは、いるし……わっ、わたしも、指揮官なら——」

なにやら誤解があるようだが、長門は既に本気のようなのだ。

据え膳食わぬはナントヤラ……これは確か、重桜のことわざだったように思う。それに、まさかこれは長門に試されているのかと思うと、どういう選択肢が正解なのか悩む。

悩むが、気持ちが悪くするところは一つしかないように思えた。

だが、そんな時……けたたましくドアが再度開かれる！

「長門姉！ みんなを連れてきたよ！ ユニオンの人たちが、軽食を用意してくれたみたい！ ロイヤルのみんなも、お茶を……あれえ？

長門姉？」

長門は、ギギギギと音がしそうなぎこちなさで、ドアを振り返った。そこには、名だたる母港の面々がざらりと並んでいる。

シユボン！ と真つ赤になった長門は、その場で突然立ち上がった。

「わっ、わた……ゴホン！ よっ、余が長門！ 重桜の長門！ 今宵は歓待を持って戦友を迎えようぞ！ さ、さあ、ぱじゃまばーていなる一夜を皆で！」

そこから先は、指揮官と長門への質問攻めが始まった。ビッグセブンの一角とはいえ、まだ年端もゆかぬ少女……レキシントンを中心とする機動部隊の波状攻撃、そして潜水艦たちの鋭いツツコミとアシストが、彼女を年相応の少女へと変えていった。

指揮官は、長門の素顔をその目に焼き付け、共に戦い抜くと誓う。

だが、母港にはあつというまに、指揮官ロリコン疑惑が蔓延してしまふのだった。

SUBMARINE BRIDE

指揮官として、恥ずべきだと思う。

今日に限って、絶対に会いたくないKAN—SENがいた。部下にして戦友、それ以上の存在である少女たちに対して、そんな感情を抱いてしまう自分が情けない。

そして、そんな彼の前にその少女は現れた。

ここ最近を思えば、対面は不可避だった。

「Salute! 指揮官、もうお仕事は一段落? ねえねえ、一緒にお昼寝しようよ〜」

彼女の名は、シユルクーフ。潜水艦だ。

アイリス生まれの異端児とも言える少女で、その豊満に過ぎる肢体をこれでもかと押し付けてくる。快活で闊達、物怖じせず恐いものも知らない。無知や蛮勇ではない、本当の勇気を知る女の子なのだ。

潜水艦でありながら、敵前に浮上しての砲撃を敢行する。

指揮官は何度も、彼女の英雄的な行為に救われたのを覚えていた。

「あれえ? 指揮官? なんか顔、赤いよ? 風邪かなあ、それは困るなあ、つと〜!」

今日も執務室で、シユルクーフは迫力のヒップラインを机の上に乗せてくる。お行儀が悪いのだが、どうしても注意できない。ケルンやロンドンのように、かしこまられてもそれはそれでむず痒いからだ。

無遠慮にシユルクーフは、ごくごく自然に顔を寄せてくる。

コツン、と指揮官の額に彼女は自分の額を押し当てた。

「んー、熱はないみたい! おっかしいなあ、顔が真っ赤。……あ!

そ、そういうの? ねえ、指揮官……もしかして、私のこと……うう〜、嬉しい!」

ガシリ! と抱きつかれた。

巡洋艦級の見事な胸の実りが、その谷間に指揮官の顔を招き入れてくる。

呼吸が苦しくなる中で、確かに彼は甘やかな香りに包まれていた。ますます気まずい……無邪気なスキンシップが、指揮官の罪悪感を

加速させる。今日に限っては、会いたくなかった。明日までは、顔を合わせずやり過ごしたかった。

だが、シユルクーフはマイペースが信条の天真爛漫な女の子なのだ。

「もお、指揮官たらさあ。照れちやつて……今日はじゃあ、私が膝枕してあげちやおうかなあ。え？　いつも先に寝るのは私だつて？　その時は、うん！　指揮官が膝枕してよ」

シユルクーフには、敵わない。

トラブルメーカーで、規律も規則も乱し放題。ベルファストが眉根を釣り上げる顔を、いつも思い出してしまう。どういう訳か、ロイヤルとアイリスのKAN—SENは、ウマが合わない者が多い。戦場でこそ阿吽の呼吸だが、お国柄というものが私生活には滲み出てしまう。

指揮官がおろおろしていると、執務室のドアがノックと共に開かれた。

「指揮官？　さつきからノックしてるのだけど……あら？」

現れたのは、レキシントンだ。

指揮官の秘書艦にして花嫁、寝食を共にしている女性である。いつも姉ぶる彼女は、抱き合う指揮官とシユルクーフを見て、にんまりと微笑んだ。

「あらあら、お邪魔だったかしらあ？　もう、弟くんも隅に置けないわねえ」

いつものおっとりした声だ。

今度はシユルクーフが真っ赤になって、弾かれたように指揮官から離れる。彼女にも恥じらいはあるし、なにより道理はわきまえている。アイリスの女性は奔放でおおらかに見えて、とても義理堅いだ。

彼女は執務机から降りると、俯き口をもごごつかせてから、顔をあげた。

「ごめん、レキシントン！　でもね、これは違うの……私が一方的に言い寄ってるだけで。その、指揮官はでも、私のことなんか。だから、

これは違うの！」

だが、余裕の笑みでレキシントンは鞆に手を差し入れる。

そして、小さな小箱を指揮官へと投げてよこした。

「忘れ物なんて、駄目よ？ 弟くん、こういうところは間が抜けてるのよね」

お礼を言っつて、指揮官はそれを受け取った。

そして立ち上がると、改めてシユルクーフに向き直る。

彼女の前にひざまずき、先程レキシントンが持ってきてくれた小箱を開く。

その中には、宝石の輝く指輪が収まっていた。

シユルクーフは、なにが起こったのかわからず目を白黒させて固まった。

「え、あ、おおう？ ま、待って、指揮官、私……ええーっ！ ど、どうして？」

彼女の問にただ、結婚してほしい旨を伝えた。

どうしてと言われても、こうしたいからだとか答えられない。

勿論、レキシントンに真っ先に相談したし、彼女は快く承知してくれた。だから、二人目の妻としてシユルクーフを娶りたいのだ。

混乱するシユルクーフに、そつとレキシントンが寄り添う。

彼女はシユルクーフの肩を抱き、聖母のような笑みを浮かべていた。

「シユルクーフ、指揮官のことは嫌いかしら？」

「そ、そんなっ！ すつ、すす、すつき！ ……デス」

「なら、指揮官の気持ちに応えてあげて。ね？」

「で、でも、レキシントンは」

「これは私の望みでもあるのよお？ ……指揮官に、ひとりぼっちになつてほしくないもの」

レキシントンは、昨夜の夜にそうしたように、シユルクーフに語り出した。

彼女たちはKAN—SEN……キューブから竜骨のデータを再現されて生まれた、大洋の戦乙女なのだ。可憐な美しさは、同時に残酷

な戦闘兵器の側面を持っている。

故に、いっどこで戦没するか、わからないのだ。

それを知るからこそ、昨夜レキシントンは言ってくれた。

もし自分が沈んでも、決して一人になんかならないで、と。

そのことを知ったシユルクーフの瞳に、大粒の涙が浮かんだ。

「あらあらあ、しようがないわねえ。さ、泣かないで。指揮官のために、笑って」

「で、でもお」

「指揮官ね、今日はあなたにプロポーズしたかったの。でも、結婚指輪を忘れて出掛けちゃったのよ？ ふふ、そんな人だからこそ、あなたの支えが必要な」

レキシントンの言う通りだ。

バツが悪くて、求婚は明日に先延ばしするしかないと思っていたのだ。

だが、いつものようにシユルクーフはやってきた。

指揮官は知っている。能天気で遊び人、KAN—SENの自覚がないサボリ魔と思われるシユルクーフが……潜水艦隊と水上艦たちの間を取り持ち、両者の連携強化のために毎日頑張っていることを。

その働きがあるからこそ、彼女は堂々と指揮官の元へサボりにくるのだ。

そんな彼女をいつしか、指揮官は信頼し、愛情を寄せるようになっていたのだった。

「……わ、わかったわ！ 指揮官！ 私、指揮官のお嫁さんになる！」

……絶対に、ぜえーつたいに！ ひとりぼっちになんかさせないから」

シユルクーフは指輪を受け取ってくれた。

そんな彼女を、レキシントンの祝福するように抱き締める。

この母港では、艦隊を任される指揮官は皆、一人で複数の妻を娶っている。それは、指揮官に想いを寄せるKAN—SENたちが進んで望む環境だった。誰もが皆、戦いに命をかけている。指揮官の采配一つで戦没する運命を、既に受け入れているのだ。

だからこそ、多くのKAN—SENに愛し愛されてほしい、そう思うのだ。

「じゃあ、シユルクーフは今夜、うちにいらっしやいねえ？」

「……ほへ？ え、あ、あの！ でも、指揮官の宿舎にはレキシントンが」

「いいのいいの、いいのよお。ふふ……指揮官のこと、私がたつぷり教えてあげるわよ？」

「そ、それは……おっ、おねがいますっ！ ……レキシントン、姉様」

こうして、新しい家族が増えた。

周囲からは、潜水艦と結婚した物好きとして、このあと少しからかわれ続けることになったが、気にしていない。潜水艦なんかという奴は、浮上しての砲打撃戦で黙らせてしま……シユルクーフはそういう女の子だ。

だが、彼女を迎えた三人での日々は、より一層彩り豊かなものへと変わってゆくのだった。

SUMMER BEACH TAG MATCH

ビーチにさざななみが、寄せては返す。

少し早めの海開きを祝福するように、天には燦々と太陽が輝いていた。

気温32度、夏日。

指揮官はたまには息抜きをと、KAN—SENたちでごった返す砂浜に来ていた。見渡せば、今日も母港に一時の平和が満ちている。

ビーチチェアに身を沈めて、彼は眼前の光景に目を細めていた。だが、突然隣から双眼鏡が渡される。

首を巡らせれば、水着のアークロイヤルが同志を見る目を輝かせていた。

「閣下もきつと、駆逐艦の子たちを……そうです！ 違いありません。さあ、私の予備の双眼鏡を」

なんの話だと思つたが、つい受け取ってしまった。

アークロイヤルは時々、妙だ。いつもは毅然として凛々しいのに、駆逐艦の前ではまるでだらしない。駆逐艦の少女たちは幼い容姿の者が多く、彼女にはそれが憧れと慈しみを注ぐに足る対象となるようだ。

ともあれ、しょうがないので一緒に双眼鏡を覗き込んでみる。すると、波打ち際にネットが張られてるのが見えた。

どうやら、これからビーチバレーの試合があるらしい。

「閣下、二時の方向、艦影！ ……あれは重桜の文月、三日月、水無月、そして卯月！ はあ、かわいい……尊い！」

隣のアークロイヤルを放置し、指揮官は今正に始まらんとする一戦に注視した。どうやら2on2で試合が行われようとしていた。

コートの手前側には、見慣れた水着姿が二人。

勿論、今年の新しいおろしたての水着を着ている。

視線に気付いたのか、秘書官にして妻のレキシントンが振り返った。こちらに微笑み手を振っている。空母は本当に目がいい。

その隣は、シユルクーフだ。

「むむ！ 閣下、続いて八時の方向、艦影多数！ クツ、水着が七分で裸が三分だ……は、裸っ!? ル・トリオフアン、それはいけない！ それ以上いけない！ は、鼻血が」

どうやらアークロイヤルは、見てはいけない方向を見てしまったようだ。

そつと彼女の傍らに双眼鏡を返して、指揮官は立ち上がる。

自分の第一夫人と第二夫人が、そろってビーチバレーでコンビを組んでいるのだ。間近で応援してあげようと思えば、焼けた砂の上で足取りが軽い。

今日は指揮官も、ハーフパンツにアロハシャツと砕けた格好だった。

そして、ネット際には既に舌戦が始まっていた。

「……何故、私が貴様と組まねばならんのだ」

「同感だね。ぼく、この暑い中で運動なんか……まして、あなたがパートナーだなんて」

レキシントンとシュルクーフの相手は、どうやら揉めているようだ。

ふと見れば、見事な肉体美の美女が二人。際どい水着の大胆さも、二人の起伏と曲線を飾るアクセサリーに過ぎない。そして、裸である以上の美しさはまるで渚のヴィーナスだ。

ジャン・ボールとマサチューセッツは、互いに胸の膨らみを突きつけ合うように睨み合っている。険悪な雰囲気だが、構わず試合が開始された。

あの二人が珍しいなと思うが、いい傾向だと思う。

砲火を交えて戦った仲だけに、互いを認めあっている二人だから。

「レキねーさんっ！ いっくよー！」

「はいはい、シュルクーフちゃん。お手柔らかにねえ」

ボールが真夏の空に舞う。

ネットを挟んで対決するは、大海原の女神たち……空母と潜水艦のコンビが勝つのか、戦艦タッグの巨砲が勝負を制するのか。

気付けば周囲にも、沢山のKAN—SENが集まり出していた。

だが、実力が拮抗しているように見えて、徐々にリズムが狂い出す。ジャン・ボールが苦し紛れにボールを拾えば、その行く先にマサチューセッツがいない。逆に、マサチューセッツは少し寝ぼけているのか、長身を活かしたブロックで飛んでも、その手をボールがすり抜ける。

「やたつ、サービスイースツ！ レキねーさん、いい調子っ！」
「ふふ、弟くんも見てるから、これくらいはね」

レキシントンがなんでもそつなくこなす才女だとは知っていたが、運動に汗を流す姿はどこか新鮮だ。そして、彼女とハイタッチを交わすシユルクーフは、いつも以上に眩しい笑みを咲かせている。

一方で、ジャン・ボールとマサチューセッツはどうにもギクシヤクしていた。

「シユルクーフッ！ 貴様、裏切ったな！ ぐぬぬ」

「いやいや、あなたはヴィシアで彼女はアイリスだろう」

「マサチューセッツ、貴様も貴様だ！ もつと本気を出せ！」

「……あなたはどうなのさ。戦う相手、間違えてない？」

二人の間を、気まずい沈黙が横たわった。

ネットを挟んで、天国と地獄だ。

だが、それだけで終わらないのが真夏の二大戦艦だった。瞬時に二人の張り詰めた空気が、心地よい緊張感へと変換されてゆく。

大量の点差を背負った今になって、どうやらジャン・ボールは本気になったようだ。

その気迫に呼応するように、マサチューセッツも眠たげな表情を引っ込める。

そして、運命の一球がレキシントンから放たれた。

「クッ、マサチューセッツ！」

「わかってる！ ぼくは結構、対空もっ！ 得意、だからっ！」
ラインギリギリの鋭いサーブが、砂の上に突き刺さる。

かに見えたが、マサチューセッツの筋肉美が躍動した。彼女はギリギリのレシーブでボールを拾うと、そのまま前転で一回転して立ち上がる。

その時にはもう、宙へと放られたボールの下にジャン・ボールが身構えていた。

「ジャン・ボール、上げて！」

「わかっている、私に命令するな！」

全身を使つて、ジャン・ボールがいいトスを上げた。

だが、あまりにも安定し過ぎていて、スピードがない。既にレキシントンは、コートに戻ったシュルクーフとスパイクに備えている。

ジャン・ボールは高く上げすぎた……そう思ったのも、一瞬だった。砂を蹴り上げ、マサチューセッツが空へ翔ぶ。

「レキねーさんっ、来るよ！」

「ええ、任せて！」

「ぼくと高さで勝負？ 自慢のエレクトリックデューゼルじゃ、ちよつと無理、かな？」

全身を伸ばして、レキシントンとシュルクーフがジャンプした。

ブロックするには十分な高さだ。

だが、マサチューセッツのスパイクが炸裂することはなかった。

そして、彼女の背後からジャン・ボールが低く鋭く跳躍する。

「あつ、フェイント！ ずるいつ！」

「あらあら、まあまあ」

「戦艦を、大戦艦を舐めるなよっ！ このっ、一撃で……決めるっ！」

砲弾のようなスパイクが、ライン際に突き刺さった。

そのまま半分砂に埋まって、まだスピントしたボールが止まらない。

そして、四人がそれぞれ着地して明暗が別れた。

ボールを振り返るレキシントンとシュルクーフが、驚きに目を丸くしている。

一方で――

「やはりあなたはやればできるんだな！ 今のタイミング、バツチリだったよ！」

「貴様こそ、どうして……ははっ、やはり私が見込んだ戦艦だけはあるな！」

「それはぼくの台詞だよ！ さあ、反撃といこう！」

「よし、この調子で敵を粉碎してくれる！ 私たちなら、できる！」
たった一点。

僅かに一点返しただけなのに。

まるで子供のように歓喜を爆発させ、ジャン・ボールとマサチューセッツは抱き合って飛び跳ねた。客たちも思わず呆れるほどに、無邪気で、眩しくて、美しい笑顔だった。

だが、二人は周囲の視線に気付いて、弾かれるように離れる。

「ちよっ、調子に乗るなよ！ いまだ点差は歴然だ」

「そうだね……まあ、あなたも今後は気を抜かないでほしいな」

「私がいつ、気を抜いた！ 貴様こそ、今の力を最初から出してれば」

「はいはい、ほら、プレーが再開されるから」

「ぐぬぬっ！ 貴様はいつもそうだ！ いつもいつも、いつも！」

「それこそ、こっちの台詞。最近、いつも一緒だし」

こうして試合が再開される。

とりあえず指揮官は、他のKAN—SENたちが心配していた二人の仲を、あまり構わなくてもいいんじゃないかと思いついていた。日常生活でもなにかと張り合い、いがみ合い……どちらかというと、ジャン・ボールが一方的に絡んでるようで、マサチューセッツも譲ろうとしない。そんな仲を心配する声は多かったのだ。

だが、それが杞憂だったと、吹き渡る海風が指揮官に教えてくれるのだった。

CASTLE TOWER LABYRINTH

ある晴れた、午後の昼下がり。

今日も母港は、出入りする軍艦で賑わっていた。国際色豊かなドックでは、修理や改造で大忙しである。

彼は……指揮官は、こうして平和な時間の港を見るのが好きだった。

陸から見る艦は皆、荘厳な宮殿のようであり、気高き威容の城塞にも見える。

そんな中、一際目立つ塔がある。

まるで童話に登場する、悪い魔法使いの塔……そう思っていると、背後から彼は声をかけられた。

「殿様っ！ お仕事は休憩ですか？」

振り向くとそこには、お姫様がいた。

重桜の民族衣装を着た、お姫様。そう、あの魔法使いの塔の本当の主だ。

今日も山城は、にっぽりとゆるい笑顔で近付いてくる。

どういう訳か、彼女は指揮官のことを『殿様』と呼ぶ。確か重桜で君主の呼び名だ。彼女たちKAN—SENを統括する人間だが、生憎と彼は一国一城の主ではない。

そう、居並ぶ艦は全て、民を守る城や要塞ではない。

民を守るのは同じだが、自ら戦いの海へと漕ぎ出す鉄のいくさぶねなのだ。

「そうそう、聞いてください殿様！ 私、今……今っ、開発されてるんです！」

思わず指揮官は、突然の告白に黙った。

意図せずけしからん想像が脳裏を駆け巡る。

気付けば顔が熱くて、とてもじゃないが妻たちには見せられない表情をしているかもしれない。

「あっ、間違えました……そう、改造。改造されてるんです！」

そう、ドックで山城の艦装は大規模な改装を行っている。

その許可を上層部に取り付けたのは、ほかならぬ指揮官だ。知っているし、決して忘れない。

山城はキューブから生まれたKAN—SENの中では艦歴の長い娘である。

言い換えれば旧式で、運用の難しさが度々目立ってきた子だった。

だが、指揮官はそんな彼女を弱いとは思わない。

まだまだ活躍の余地はあるし、その機会を作るのが自分の仕事だと思っている。

「ふふ、殿様にだけ……ちよつとだけ、改造の秘密を教えちゃいます」
間近に迫る山城が、ぐつと身を乗り出してくる。

そのスタイルのよい曲線美が近付いてきて、思わず指揮官はのけぞった。鉄とオイルの匂いが潮風に入り交じる中、甘い香りが鼻孔をくすぐる。

鼻先同士が触れ合うほどに近い距離で、山城は真顔になった。

いつも笑顔のマイペース娘が、珍しく真剣である。

「殿様……私、航空戦艦になるんです！」

勿論、承知している。

後部の砲塔を撤去し、そこに小規模だが航空甲板を増設するのだ。運用できる航空機は水上機等に限られるだろうが、これで戦術的な運用に幅が出る。

もう既に、戦艦同士が砲火を交える時代は終わりつつあった。

まだまだ必要な戦力ではあるが、航空機や駆逐艦との連携が欠かせない。

そして、セイレーンとの戦争では次第に、空母を中心とした機動部隊による戦術が定着しつつある。

そんな中での実験的な意味合いも強いが、指揮官は可能性を信じていた。

そんな彼に、山城は少し得意げに小声でささやく。

「航空戦艦……つまり、私は空を飛べるようになるんです！ 凄いですう……これで飛行機もなんのその、です！ もーっと、殿様のお役に立てますよ、私！」

指揮官は再度絶句した。

そして、次の瞬間には込み上げた笑いに無条件降伏してしまう。気付けば彼は、声をあげて気持ちよく笑っていた。

無邪気で無垢な山城の、そのかわいらしい勘違いがとてもおかしかった。おかしかったが、決して愚かだとは思わない。

なにより彼女は、今もフンス！ と鼻息も荒く両の拳を握っている。

「あれえ……殿様！　なんで笑うんですか！　……山城は、もつと殿様のために戦いたいです。もつともーつと、お役に立ちたいんです！」

姉の扶桑が知的な美人なら、妹の山城は可憐な童女のあどけなさを残している。どちらも好ましい女性だし、仲間としても頼れる存在だ。

そして、山城だけが殺伐とした鈍色の戦争に、一風の涼を運んでくれる。

いつでも一途で一生懸命、ドジでドン臭いが誰からも好かれる不思議な少女だ。

指揮官はひとしきり笑ったあとで、本当のことを教えてやる。

瞬間、シュボツ！ と山城は真っ赤になった。

「えう……そ、それって……つまり、その……お空、飛べないんですか？」

指揮官は黙って頷く。

つついっい神妙にしてしまったので、笑いの第二波が休息接近中だ。既に彼は、山城という名の喜劇兵器から爆笑攻撃を受けている。

だが、それはとても愛らしい。

この娘はいつも、周囲を笑顔にさせてしまうのだ。

「航空戦艦って、航空母艦の機能を持った戦艦なんですか……ほええ」山城は心底感心したように、目を丸くしてしまった。

あまりに素直で、無防備で、そして眩しい。

純真な彼女の心には、この戦争はどう思われているのだろう。ふと、そんなことを指揮官は考えてしまった。

世が世なら、彼女のような人は平和な時代に幸福を求めている筈だった。

人類に天敵がいなければ、世界を繋ぐ海が平和なら……山城もまた心安らかでいられた気がするのだ。平和な時にこそ、山城の優しいほがらかさが必要なのだ。

だが、彼女はKAN—SEN……旧大戦の記憶が象る、戦うだけの実体を持つ幻影。

それなのに、山城には表情が豊か過ぎるのだ。

「むむむ……はっ！ どうしましよお、殿様あ！ 私、私」

その場でびよんぴよんと、山城は焦り顔で跳ねる。

どうしたのかと問うと、意外な答が返ってきた。

「私……お伊勢さんに、教えちゃいました。航空戦艦、飛べます！ つて言っちゃいましたあ！」

今度は指揮官が焦る番だった。

山城に悪気はない、むしろ親切から出た言葉だったと思う。

因みに伊勢もまた、古い艦歴を持つ超弩級戦艦である。武道を嗜み、妹の日向と共に日夜道場で汗を流している。竹を割ったような性格の、気持ちのいい女性だが……怒ると怖いし、嘘には厳しい人でもある。

騙すつもりはなかったにしろ、山城は伊勢に誤った情報を伝えてしまったのだ。

「どうしましよ、殿様。お伊勢さん、怒るかも……これは、薙刀特訓三時間コースかも！」

すぐに容易に、想像できた。

道場で伊勢にしごかれ、半べそで薙刀を振るう山城の姿が。

ちよつとかわいそうだけど、やっぱりかわいい。

悪いなと思ったけど、クスツと笑えてしまった。

それを見た山城は、頬を膨らませる。

「もお、殿様！ 私、困ってるんです。笑うなんて……でも、ふふ、そうですよ」

すねて見せたかと思えば、また笑う。

やはり、笑顔がいい。

ころころと表情を変える、感情表現豊かな山城が眩しい。

「お伊勢さんに謝りにいかなきゃ。うう、怒られるかも……でも、ごめんなきいしなきや」

つついっ指揮官は、自分も一緒に行こうかと口を出してしまう。

どうしても山城を見てると、構いたくなってしまふのだ。

だが、山城は彼の申し出にパツと表情を明るくして、そして頸をブンブン横に振る。

「ううん、自分で言います。私の勘違いだし、私がちやんと言わなきゃ！　ですよね、殿様！」

そう言うのと、一人で大きく頷き、山城は来た道を走って戻る。

走りながらも、振り返って大きな声で手を振ってくれた。

「殿様、改造が終わったら山城に乗ってくださいね！　私、生まれ変わったこれからも、ずっと、ずっと、ずーっと！　殿様と一緒に戦いますから！」

元気よくそう言つて、山城は行ってしまった。

その背が見えなくなるまでずっと、指揮官は目を細めて見送る。

今日もドックの中の戦艦山城は、誰よりも高く長い艦橋で母港の平和を見守っていた。

RADICAL WOMAN LASH

指揮官が学園区での仕事を終えると、既に時は昼下がりに。

今日も潮風が、爽やかな空気を運んでくる。

夏の盛りでキラついた太陽さえ、ここでは静かに輝いていた。

さてと、オフィスに戻るべくバス停へ向かう。移動にはリムジンを使う者もいたし、指揮官の権限で秘書艦に車を運転させる者もいた。

だが、少年はなるべくKAN—SENたちと同じ交通手段を使うようにしていた。

小さな端末を取り出せば、あいにくどうやらバスの時間まで少しある。

いつそ歩こうかと思った時、不意に背後で声がした。

「やあ、指揮官。この時間はバスはやめたほうがいい。もうすぐ駆逐艦の子たちが下校時間だからね」

振り向くとそこには、制服姿の少女が微笑んでいた。

凜として涼やかで、ショートカットも手伝って中性的な顔立ちだ。

それでいて、すらりと手足の長い瘦身は、確かに少女特有の柔らかな起伏が見て取れた。

彼女の名は、ボルチモア。

ボルチモア級重巡洋艦のネームシップだ。

「バスを待つにしても、この炎天下だし……とてもじゃないけど、オススメできないな」

そう言つて、ボルチモアは引いていた自転車に颯爽と跨った。

スカートのプリーツが、ふわりと翻る。

そのまま車上の人となると、ボルチモアはペダルを蹴って指揮官の前を通り過ぎる。そして、目と鼻の先で停止して振り返った。

ポンポンと自転車の荷台を叩いて、白い歯を零す。

「ほら、乗って乗って。司令本部まででしょ？ 送ってくよ」

指揮官は驚き、同時に戸惑った。

自転車の二人乗りは、基本的にあまり褒められたことではない。危ないし、艦隊のメンバーであるボルチモアになにかあったら大変であ

る。

同時に、非常に魅力的だ。

単純に、オフィスに早く戻れるからだけではない。

どこかで自分が知ることさえ忘れた、青春なるものの甘酸っぱさを感じたからだ。

とはいえ、どうしたものかと返事を選んでみると、

「いいから、遠慮しないで。怒られたりしないよ？　だってここ、学園区だし」

思い出した。

ここはKAN—SENたちが女学生として通う学び舎で、ユニオンやロイヤルといった各陣営の寮舎が並ぶ学園区だ。この場所では、KAN—SENたちによる自治が認められている。

とどのつまり、同じ母港でも半ば治外法権なのだった。

それに、先程の心配も杞憂というものである。

キューブと呼ばれる物質から生成される、過去の艦歴からイメージされた鋼の戦乙女……KAN—SEN。現代に蘇った軍艦を纏う彼女たちの身体能力は、人間とは比べ物にならない。

自転車の二人乗りで事故に合うなど、飛行機事故よりも確率の低い奇跡みたいなものだ。

おらずと指揮官は、少し高い自転車に跨った。

「しっかりと掴まって」

ボルチモアが前を向くと、ペダルを踏み込む。

慌てて少年は、目の前の柳腰に抱きついた。

瞬間、風になる。

まるで滑るように軽やかに、二人を乗せたスポーツタイプの自転車が走り出したのだ。なんの危なげもなく、静かに軍港の方へとなだらかな坂道を降り始める。

周囲の景色は皆、グングン背後に飛び去っていった。

「指揮官、今日はどうして学園に？　あ、待って……当ててみせるから」

どこか楽しそうに、ボルチモアは息を弾ませていた。

そのまま彼女は、一気にギアをトップに叩き込む。

対向車もまばらで、自転車はまるでレールの上をなぞるように路肩を疾走した。

「食堂の件、かな？ ほら、最近メニューが増えたし。指揮官が手配してくれたんだよね。それとも、あれかな……秋の文化祭の件かな」

なんだかボルチモアは、とても楽しそうだ。

そして指揮官は、そんな彼女の背中にへばりついている。

真っ白なシャツの向こう側に、確かなぬくもりがあつて、鼓動が息衝いている。

KAN—SENたちは人間ではないが、高鳴る心臓の音が感じられる気がした。

そんな時、不意にボルチモアがブレーキを握り締めた。

急停車で荷重がフロントに押し出され、彼女との密着度が増す。

慌てて離れると、もう既に次のバス停の前だった。

そこでベンチに座っていた少女が、ボルチモアに声をかけたのだ。

「お疲れ様、ボルチモア。あら、指揮官も一緒なのね。……なんだか怪しいですわ、ふふふ」

「やあ、エイジャックス。たまたま学園で一緒になってね。バスまで少し時間があるし、送ってくことにしたんだ」

「あら、そうなの？ それだけ？」

「そうさ、私は重要な輸送任務中なんだ。要人護衛も兼ねたね」

「まあ、そういうことにしといて差し上げますわ」

優雅で優美、それでいて鋭いトゲを隠した少女はエイジャックス。ロイヤル所属の軽巡洋艦である。指揮官はよく、ややサディストなきらいがある彼女に随分とかわいがられているのだった。

勿論、そんなエイジャックスも戦場では頼れる仲間で、とても信頼している。

それが伝わってるからか、からかったりいいじったりしてくる彼女にも悪意は感じられなかった。

「それはそうと、ボルチモア。明日の放課後はお暇かしら？」

「明日？ えっと、どうだっけな。ちよっと待って」

「ええ。速急に確認して頂戴」

ちよつと長くなるのかなと思い、指揮官は一度自転車を降りる。

ボルチモアは、アナログな紙媒体の手帳を取り出し、明日のスケジュールを確認した。

「明日はまず、バスケット部に助っ人を頼まれてて」

「まず？　まずって、どういうことですか？」

「そのあと、重桜の子たちの柔道の稽古相手になって」

「……で？」

「それから、映画研究会のフィルム整理を手伝うことになってる」

「はあ……いいように使われてるんじゃないかと？　ま、私が言えた義理じゃありませんけど」

「どうやら、エイジャックスもボルチモアを頼ろうと思っていたらしい。」

「実は明日、テニスの試合がありますの。ダブルス、私のパートナーをお願いしたかったのだけど」

「あ、それって鉄血の子たちとの？」

「ええ。でも、忙しいのなら無理ね。他を当たりますわ」

「その試合、行くけど」

「へっ？　ま、まあ！　そう、それは助かるわ。貴女なら、脚を引つ張ることもないでしょう」

エイジャックスが満面の笑顔を咲かせて、慌てて澄まし顔を取り繕う。

「だが、ぱむ！　と手帳を畳んだボルチモアには、不敵な笑みが浮かんでいた。

「鉄血からも、テニスの助っ人を頼まれてたんだ。楽しみだね、エイジャックス」

「なっ……う、裏切り者っ！」

「裏切っちゃいないよ、オイゲンの方が先に話を持ちかけてきたんだもの」

「なんてことかしら……助けにならないばかりか、既に敵に回っていたなんて」

どうやら、ダブルブッキングだったようで、それも紙一重の差で鉄血に先を越されたようである。ボルチモアは「そういう訳だから、ごめんね」と一言謝って、再び自転車に乗ろうとする。

しかし、エイジャックスは溜息を零しつつ、指揮官を見て……ニヤリと笑った。

「ちよつと、指揮官？　こういうのは普通、殿方が自転車をこぐのではなくて？」

美しい容姿を全身全霊で裏切る、剃刀のような視線が指揮官に突き刺さった。あの、見下すようなエイジャックスの目に、指揮官はたまらなく弱い。

慌てて指揮官は、ボルチモアからハンドルを奪って自転車に乗る。

爪先立ちでギリギリ、どうにか地に足がついた。

「えっ、いいよ指揮官」

「ふふ、乗せてもらったかどうかしら？　みんなの憧れのボルチモアお姉さま？」

「……あつ、エイジャックス！　ちよつと、陰険じゃないか」

「たまには女の子っぽいこともやらされてみてはどうかと。ほら、指揮官は急いでるのではなくて？」

少し顔を赤らめたボルチモアだったが、舌戦ではどうやらエイジャックスに勝てないらしい。恥ずかしそうにそそくさと、彼女は脚を揃えて荷台の上に腰掛けた。

「覚えてなよ、エイジャックス？　明日、テニスでコテンパンにしたげるから」

「あーら、怖い怖い。ふふ……明日の試合、楽しめそうね」

「お互いにね。じゃ、また明日ー」

「ええ、ごきげんよう」

指揮官は、精一杯の力を振り絞ってペダルを踏んだ。

少しよろけたが、再び自転車は走り出す。

そして、そつと背中にボルチモアの体温が密着してきた。

ふわりと風になびく髪から、甘やかな香りが鼻孔をくすぐる。

なんだか身体が熱くて、指揮官はとにかく一生懸命に自転車をこい

で走るのがだった。